

小・中連携した活動事例(中学校1年生における小学校との連携の在り方について)

「外国語教育強化地域拠点事業」～山口県光市立室積小学校・室積中学校～

地域の特色・課題

校種間のつながり(「人」・「もの」・「方法」の3つの連携)を活かした外国語教育の推進

めざす
子どもの姿

室積中学校

- ・まちがいをおそれず、自分の意見や考えを積極的に表現できる生徒
- ・英語を用いて、地域や社会と積極的に関わることができる生徒

室積小学校

- ・まちがいをおそれず、英語で思いを伝え合うことで、英語を使う喜びを味わうことができる児童
- ・英語を用いて、自分のことや友達のことを表現できる児童



「人」の連携

【教職員のつながり】

- ・毎月1回の英語教育ベース会議
- ・校種間による乗り入れ授業
- ・小中合同研修会の実施
- ・気軽な授業参観 など



【児童生徒のパフォーマンス動画を視聴しながら評価の研修をする小・中学校員】

【児童・生徒のつながり】

- ・動画による間接交流
- ・小中合同授業の実施



【中学生の視聴する小学生】

【お店役とお客役に小中学生】

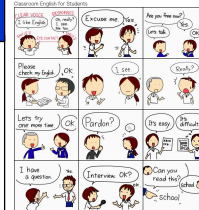


「もの」の連携

【教材のつながり】

- ・クラスルームイングリッシュ(児童・生徒用)
- ・CAN-DOリスト
- ・評価シート
- ・ワークシート
- ・動画コンテンツ など

小中で共通の Classroom English



取組事例②

取組事例③

「方法」の連携

【授業方法のつながり】

- ・授業スタンダード4Stepsの活用(授業の組立)
- ・授業や単元の展開方法
- ・ICTの活用方法
- ・評価方法 など

成果

・それぞれの学校で目指す子どもの姿(どんな力をつけたいのか)を共有したり、授業づくりで大切にしていること等の確認ができています。

・小・中学校ともに、授業改善に活かされている。

・学習意欲の向上とスムーズな接続につながっている。

意識調査：外国語の授業は好きですか？



今後の課題

・中学校においては、英語でのやりとりの流暢さだけでなく、英語教員の専門性をいかして、英語表現のより細かいところまでの正確さの指導が求められる。

・文字指導については、小学校からのスムーズなつながりを意識しながら、抵抗感なく取り組める指導方法を研究していくことが必要である。

取組事例①

★授業スタンダードの活用

授業4Steps

- 1 Warm Up
- 2 Practice/Today's Goal
 - ・表現への慣れ
 - ・動くCAN-DOリストの視聴
- 3 Activity
 - ・クラスルームイングリッシュの活用
 - ・リアクションを含めた自然なコミュニケーション
 - ・タブレット端末の活用
- 4 Look Back

★授業や単元の展開方法【小中共通の取組→小学校からの中学校への積み上げ】

①GOALイメージをもたせた授業展開

- ・動画によるモデルの視聴

②子どもの興味関心を大切にしたい授業や単元の展開

- ・地域の素材をいかした単元計画
- ・小中連携をいかした単元計画

③場の設定の工夫

- ・必然性やリアリティのある場づくり

④表現力を高めるアクティビティの実践

- (例) 1 minute talk
インタビュービンゴ etc
- 表現の定着
 - ・語彙や表現の引き出しの増加
 - ・表現の高度化と正確性

⑤振り返りカードの活用

- ・良さの共有
- ・教員やALTへの質問(知りたい表現)

小・中連携の強化についての取組事例

「外国語教育強化地域拠点事業」～徳島県阿波市久勝小学校・伊沢小学校・林小学校・阿波中学校～

地域の特徴・課題

徳島県阿波市では、平成18年度よりすべての小学校に地域の英語の堪能な人材を英語講師として配置し、小学校外国語活動を行ってきた。地域の小・中・高等学校が連携を深めつつ、新学習指導要領の趣旨を踏まえた、児童生徒の実態に応じた外国語教育を行うことで、「異文化や国際社会への興味関心」、「英語を学ぶ意欲」が児童生徒に育ちつつある。一方で、「伝え合う力」や「望ましい関係を築く力」の育成については課題が残っている。

取組事例①

- ◎小中高の一貫したCAN-DO型学習到達目標と小中で様式を揃えた年間指導計画の作成
- 小学校から高等学校までを見通した一貫したCAN-DO型学習到達目標を作成
 - ⇒小中高等学校の円滑な接続を見通した、系統性のある教育活動を行う。
- 中学校教員の小6授業への参加
 - ⇒週1時間、中1担当教員が小6授業へ参加し、小学校教員とともに指導を行う。
 - ⇒小学校卒業段階でのCAN-DO型学習到達目標の達成状況が把握できる。
- 小中の学習内容の系統性を意識した年間指導計画の作成
 - ⇒小中で年間指導計画の様式を揃え、学習内容を共有する。



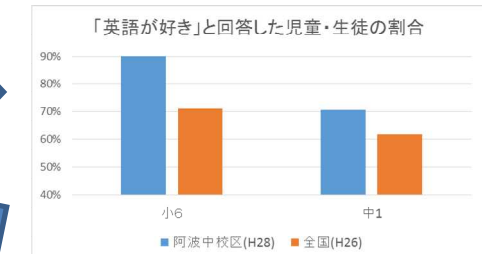
↑小中の教員で共有した学習到達目標に達している児童の動画

成果

①生徒の英語力が向上した



②英語の学習を肯定的に捉える児童生徒が多い



取組事例②

- ◎「やり取り」の指導を軸とした小中連携
- 継続して行う「相手を大切にしたい聞き方・話し方」の指導
 - ⇒児童生徒の発達段階に応じ、「相手を大切にしたい聞き方・話し方」を指導する。
- 中学校における「発表」から「やり取り」へと繋ぐ単元計画の工夫
 - ⇒「やり取り」の前に「発表」の活動を行い、自分の考えをしっかりともてるようにする。
 - ⇒中学校での「やり取り」の活動を見通し、小学校で「Small Talk」を行う。



↑やり取りの活動の様子

取組事例③

- ◎児童・生徒の小中連携
- 中1生の小6授業への参加
 - ⇒中1生がビデオレターで小6授業に参加し、小6生のモデルとなるようにする。
- 中学生に伝えることを目的とした小6単元の開発
 - ⇒卒業間近の小6生が、中1生にメッセージを伝える。



↑中1生によるビデオレター

取組事例④

- ◎教員の小中連携
- 教材・教具の共有
 - ⇒小学校で使用した教材・教具を中学校でも使用する。
- 指導方法・評価方法等の共有
 - ⇒パフォーマンステスト等同じ議題について小中の教員が協議し、相互理解を深める。

校区外国語教育推進委員会の様子→



↑教具の共有の様子

今後の課題

- 小中連携を図るための研修時間の確保
 - ⇒持続可能な小中連携を図るための研修時間の確保の仕方について検討する
- 移行期間における円滑な新学習指導要領の実施
 - ⇒新しく示された3観点による目標に対応した評価の仕方等についてさらに検討する
- より効果的な小中連携についての検討
 - ⇒これまでの取組を総括し、より効果的な小中連携のあり方について検討する

小・中・高連携した活動事例(秋田県由利本荘市の取組)

「外国語教育強化地域拠点事業」～秋田県由利本荘市由利小学校・由利中学校・由利高等学校

地域の特徴・課題

秋田県南部に位置し日本海に面する由利本荘市には、小学校14校、中学校10校、高等学校5校がある。これまでもFUN ENGLISH事業に取り組むなど、英語教育に対する研究の土台がある。一方で、県内最大の面積を有し、八つの地区に分かれる地理的な要因もあり、近隣校との連携や、小・中・高の接続が必ずしも十分ではなかった。

小・中・高一貫した系統的な指導の実践や、学びの円滑な接続を図る取組を通して児童生徒のコミュニケーション能力の向上を図る

取組事例①

授業における小・中・高共通実践

- ①小・中・高一貫した「学習到達目標リスト」の作成・改善・活用
 - ・各校種の接続に配慮した小・中・高で1枚の学習到達目標リストの作成・改善・活用
- ②全校種での「秋田の探求型授業」プロセスに基づく授業実践
 - ・「見通しを持つ」→「自分の考えを持つ」→「学び合う」→「振り返る」流れに沿った授業展開
 - ・小・中学校で共通実践されていたプロセスを高等学校にも拡大
- ③「即興で話す」能力の段階的な育成
 - ・小:複数回のやり取りのある対話→ 中:考えや気持ちを伝え合う活動の工夫→ 高:ディスカッションやディベートの充実(高3のゴールを見据えた、小学校からの計画的な取組)
- ④小1から高3まで全て英語で行う授業の実践
 - ・中・高での授業を見据え、小学校から基本的に全て英語で行う授業を実施
 - ・国際教養大学提供「Quick Reference」(教員の英語発話集)の活用

成果

小学校

全て英語で行う授業が展開された結果、特に児童のリスニングとスピーキングの能力が大きく向上した。

中学校

小学校で教科型を経験した児童は中学校でも高い外国語学習への意欲を保持できている。

高等学校

生徒の言語活動量が増加した。また、英検準2級以上の取得率が大きく増加した。

全校種

大学の協力も得て、全校種で共通理解を図り、児童生徒の成長を追いながら英語教育を推進できた。

取組事例②

授業外での小・中・高連携実践

- ・国際教養大学の留学生との計画的交流(各校種)
- ・高校英語科教員による中学校への出前授業の実施
- ・中学校英語弁論大会への小学生・高校生の参加
- ・高校生の外国語活動授業への補助員としての参加
- ・月1回の担当者会議の実施(各校種代表者出席)

留学生との交流学习



今後の課題

- 小:教科における評価の在り方
- 中:「正確さ」を高める指導の工夫
- 高:目標、内容の更なる高度化

小・中・高連携した活動事例「外国語教育強化地域拠点事業」京都府南丹市立殿田中学校

地域の特色・課題

- (1)市内全小学校における中学校英語教員T2授業 (2)南丹市国際交流協会と学校との連携
- (3)小中学校の連携に比べて高等学校との連携の希薄さ

小中高の系統性がある学びを通し、豊かなコミュニケーション力を有するグローバル人材を育成する

取組事例①

「聞く」「話す」を中心とした小学校での学びを大切にする授業改善(小中接続)

中学校1年生の教科書の指導内容である表現やフレーズは、小学校で既に学習していることが多い。

中学校教員が小学校での指導内容を確実に把握し、授業において生徒が既に知っている表現を効果的に活用することで、学習意欲の向上を目指した。

また、「聞く」「話す」を中心とした言語活動の充実を一層図る等、小学校での学びを大切にした指導を心がけ、小学校英語において培った「臆せず英語を話し、英語学習を楽しむ」という姿勢や意識を更に高めることをねらった。

取組事例②

小中高一貫した系統性のあるCAN-DOリストの設定(小・中・高接続)

小中高一貫した系統性のあるCAN-DOリストの見直し及びCAN-DOリストにつながる学年到達目標の設定を行った。各校種が共通の考え方で目標と観点を設定し、接続がより滑らかになるように取り組んだ。

また、作成したCAN-DOリストを実際に活用することで「英語を使って～ができる」をゴールにおいたバックワードデザインの授業を確立し、生徒がより意欲を持って目標に向かい学習できるように取り組んだ。

取組事例③

パフォーマンステストの開発及びルーブリックの設定(中高接続)

パフォーマンステストについて先進的に研究を進めていた高等学校と連携し、その開発及び評価についてのルーブリックの研究を進めた。テスト作成においては、必然性のある場面設定、興味・関心が持てる題材、教科書との関連性に留意した。評価についてはルーブリックを「発表」「やりとり・質問に答える」「やりとり・インタビュー」「音読・暗唱」「ライティング」「ディベート」の6つに分け、それぞれ「言語」「内容」「態度」の項目に従って3段階で評価する形式を作成した。

成果

- (1)英語学習への高い意欲の持続【英語学習が楽しい】と答えた生徒の割合

	現1年生	現2年生	現3年生
平成28年度	74%	74%	72%
平成29年度	100%	77%	78%

- (2)小中英語学習の深いつながり「小学校での英語学習が中学校での英語学習につながっていると感じている」平成29年度の生徒の割合は以下の通りである。

中1 100% 中2 82.8%

成果

バックワードデザインの授業スタイルの確立

CAN-DOリスト及びパフォーマンステストの作成により生徒が目標を明確に持ち、学習に向かうことができている。

今後の課題

- (1)第2・3学年の授業スタイルの確立
- (2)「書く」ことについての指導方法
- (3)信頼性と妥当性のあるパフォーマンステストの見直し
- (4)更なる中高連携の充実

小・中・高連携した活動事例（小・中学校、中・高等学校の合同授業）

「外国語教育強化地域拠点事業」～奈良県 明日香村立明日香小学校・聖徳中学校・県立桜井高等学校～

地域の特色・課題 幼稚園から高等学校まで連携した、英語を使ったコミュニケーション能力の育成

小・中学校、中・高等学校の英語科合同授業 ～児童生徒が触れ合い、共に学びを深める～

取組事例①

小学校と中学校の合同授業

「えいごでおかいもの」

中学生は自分が作成した品物の絵カードを売るお店屋さん、小学生は10までの数字が書かれた模擬のお金を使って品物を買うお客さんとなり、英語でコミュニケーションを図りながら買い物をする。交流の中で中学生は、店の人として小学生に英語で分かりやすく伝えるにはどうすればいいかなどを考え、小学生と会話をする。「やさしく、笑顔で、ゆっくりと！」小学生は英語を使って楽しく買い物ごっこをする。

〈目的〉

- 中学生が相手意識をもってコミュニケーションを行う。
- 小学生が英語に慣れ親しむ。
- 小学校、中学校の教員が互いの学校の児童生徒への理解を深める。

〈中学生の振り返り〉

- ・小学生と英語を使って買い物のやりとりができた！
- ・相手に合わせてゆっくり言ったり、繰り返し言ったりできた。

Three dollars, please.

How many do you want?

Three apples, please.



成果

- 英語で分かりやすく伝えるために工夫するようになった。
- 英語の学習への意欲が高まった。

幼・小・中・高等学校の連携した英語教育の推進

明日香村一貫教育英語教育委員会
〔教育長、課長、指導主事、推進教員(幼・小・中)、英語科教諭、ALT等〕

中学校
研究会

小学校
研究会

幼稚園
研究会

高等学校英語部会

明日香村一貫教育英語教育委員会と高等学校英語部会の教員等が定期的に研修会をもち、交流行事の計画や、年間指導計画、指導方法、授業づくり等についての研究を行い、英語教育を推進する。



取組事例②

中学校と高等学校の合同授業

「自分や自分の学校の紹介をしよう」

中学生が高等学校を訪問し、中学生と高校生がペアになって、自分の好きなものについて伝え合ったり、それぞれの学校の紹介をし合ったりする。

My favorite thing is ～ . I want to be ～ . My school starts at ～ .

〈目的〉

- 高校生が、英語で分かりやすく表現するにはどのような工夫をすればいいかを学ぶ。
- 中学生が英語を使ったコミュニケーションを積極的に行い、伝わった喜びから、英語の学習への意欲を高める。

〈高校生の振り返り〉

- ・中学生と英語でコミュニケーションをするなど新鮮な気持ちで取り組めた。楽しくできたので、英語が好きだということを変更確認できた。
- ・交流することによってより自身の英語力を高めることができるんだと感じた。

〈中学生の振り返り〉

- ・分からない単語などを高校生が教えてくれた。英語でのやり取りがとても楽しかった。
- ・私もあんな高校生になりたいと思った。



今後の課題

- 各学校の英語科の学習内容にどのようにつなげるか。
- 事前の打ち合わせ等の時間をどのように確保するか。

小・中・高の円滑な接続を目指した活動事例(音声言語から文字言語, 言語活動の高度化へ)

「外国語教育強化地域拠点事業」～宮城教育大学附属中学校

中学校としての目標・課題

小学校外国語活動及び英語科の必修化を受け, 円滑に中学校の英語学習へと移行するよう, さらに, 高等学校でのより高度な英語学習へとつながるよう, 教育課程の改善や授業作りに努める。また, 各技能をバランスよく身に付け, 意欲的にコミュニケーションを図る生徒を育成する。

中学校の目指す生徒像

未来の一員として, 地域及び国内外の課題について自分の考えを持ち, 自分の意見を英語で表現したり, 相手の意見を聞いて考えを深めたりしながら, 多様な人々と英語でコミュニケーションを図る生徒

取組事例①

中学校英語への入門 1年生4月 「スタートアップカリキュラム」とClassroom English

ListeningとSpeakingの言語活動を中心とし, 小学校外国語活動及び英語科での学習内容を積極的に使用する。

第1時:オリエンテーション, 先生はどんな人クイズ 第2時:友達のことを知ろう 第3時:あいさつをしよう
 第4時:Let's Play a Board Game! 第5~7時:アルファベット大文字, Missing Game 第8~10時:アルファベット小文字
 第11時:へボン式ローマ字で名前を書こう 第12~13時:Phonics 第13時:単語・文の書き方, ノートの使い方

取組事例②

授業における交流, コミュニケーションの実際

1年生 Daily Scene 3 「小学生にクリスマスカードを送ろう」 Daily Scene 4 「小学生に中学校生活を紹介しよう」

英語を通して小学6年生と交流し, 小学生に中学校英語への展望を持たせる。中学生にとっては, 学習したことを発揮し, 相手意識を持ってコミュニケーションを図ることのできる貴重な機会である。また, 明確な目標や目的を持つことで, 音声言語から文字言語へとスムーズに自然な形で発展させることができる。

2年生 Unit 2 「ハワイの人々に宮城を紹介しよう」 Presentation 3 「ハワイの中学生と交流しよう」

3年生 Daily Scene 2 「ハワイの中学生へ手紙の返事を書こう」 Unit 6 「ハワイの中学生に日本の偉人を紹介しよう」

本学と国際交流協定を結ぶハワイ大学や現地校との交流をカリキュラムに加える。英語学習への動機付け, 知識の活用, 運用能力の向上など, 段階的に言語活動の高度化を図る。

取組事例③

パフォーマンス評価とフィードバック

Speaking Test, Speech, Interview, Presentation, Discussion, Essay …

事前に到達目標を提示し, 生徒に目標とする自分の姿をイメージさせる。また, 振り返りや成果物により, 自己の変容や成長を実感できるようにした。特にSpeaking Testでは, 生徒自身が達成感や新たな課題を持つことができる。ALTと個別に面接形式で行い, その様子を撮影する。小学校5年生から中学校2年生まで継続して実施。

取組事例④

基礎基本の定着 「Try for Basic English」

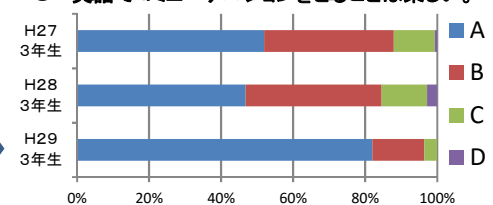
英語文の形や意味, 用法などを理解し, 身に付けているかを確認するための調査。学年が上がるにつれて学習内容と共に調査項目が増える。学習段階やその状況によって, 定着度や間違え方は異なる。また, 繰り返し使用するうちに, 比較したり違いに気付いたりしながら正しく使えるようになっていく過程が見えてくるものと考え。

成果

①スタートアップカリキュラムの成果

教員が小学校で学んだ英語を意識することで, 生徒は自信を持って安心して中学校での学習をスタートできる。また, 何をどのように繰り返し扱うのかを理解することで, 教室英語の幅も広がり, 英語で授業を展開する上でも有効であった。

②～英語生徒の意識調査～



【外部試験CTEC for STUDENTSの結果から】

Grade	Score	H29	H28
4	440～	21名	12名
3	380～	50名	46名
2	300～	47名	50名
1	0～	28名	33名

今後の課題

- ・生徒の変容に応じて, 学習到達目標や年間指導計画の修正, 更に題材や教材の開発を継続する。
- ・個別の支援が必要な生徒への手立てについて実践と検証を重ねる。
- ・実際の対話に近い素早い対応が求められる場面や紛らわしい情報が含まれる場面の練習。